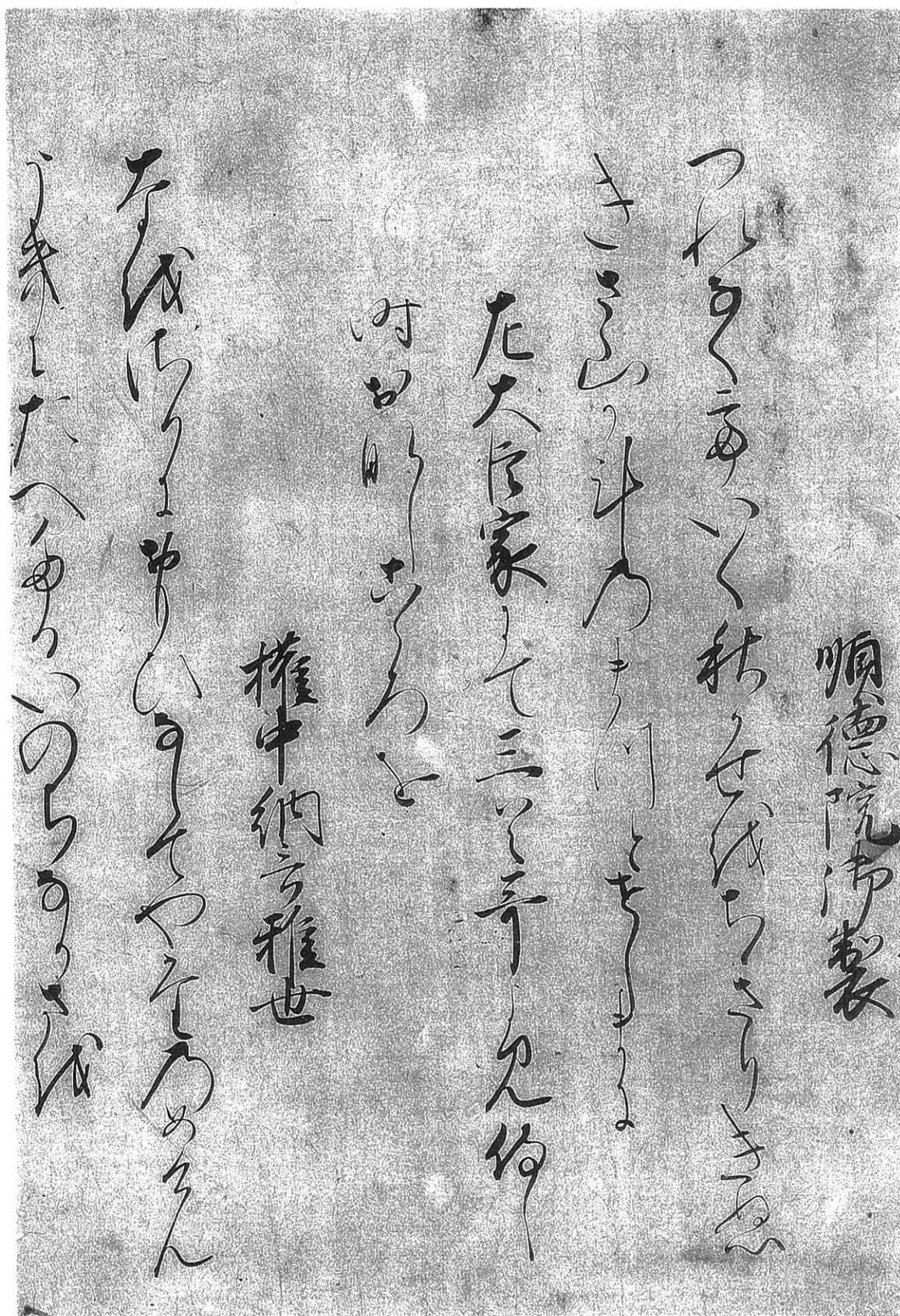


歌枕と名所



期間：平成18年11月17日（金）～12月1日（金）

鶴見大学図書館
鶴見大学日本文学会

1 古今和歌集断簡（伝藤原伊行筆）平安時代後期写 1軸

金揉箔散らし斐紙(縦21・2、横13・8糎)に巻五秋下293・294を5行書写、畠山牛庵・古筆了任の極札を添え、藤原伊行(?～1175)の筆とする。しかし伊行の手になる戊辰切・葦手下絵和漢朗詠集とは別筆。伝藤原公任筆公忠集切に料紙・筆跡とも似るがやはり別手、ツレを見ない切である。品のよい装飾料紙にゆったりとした名筆ぶりが冴え、2首目在原業平の著名な作「ちはやふる神よもきかずたつたがは／からくれなゐにみづくゝるとは」に、大和国(奈良県)の歌枕「竜田川」が詠み込まれる。

2 古今和歌集真名仮名序 鎌倉時代後期写 卷子本1軸

金茶地に瑞獸を織り出した金欄表紙。本文は斐紙(縦25・3、横14・0糎)10枚に真名序、15枚に仮名序、さらに巻二春下78・79を写した1枚、合計26枚を継ぐ。朱・墨の書き入れあるも、朱は薄れて判読困難。元来四半列帖装冊子本であったものを改装し、現在の形となった。手沢の状態から見て、冒頭に真名序・仮名序を持つ伝本と思われ、通常の古今和歌集が最初に仮名序、最後に真名所を置くのと大きく異なる。筋切本・基俊本・俊成本等平安時代の本文を伝えるものであろう。「つくばやま」(筑波山、常陸国)・「ふじ」(富士、駿河国)・「たかさご」(高砂、播磨国)・「すみのえ」(住の江、摂津国)・「おとこやま」(男山、山城国)など、歌枕の列挙される部分を展示する。

3 千載和歌集断簡 日野切（藤原俊成筆）文治4年(1188)頃写 1軸

斐紙(縦21・5、横14・8糎)に巻十九釈教1235～1237を写す。元来は毎半葉10行の列帖装冊子本。2首目「あか き」は料紙の欠損である。藤原俊成(1114～1204)が自ら書写した千載和歌集の本文として重要なのは勿論、70歳を超えた老人とは思えないほどの鋭角的で力強い書風が、古筆切の価値を高からしめている。

日野切は、千載和歌集の草稿本ではなく一種の撰者手控え本と考えられ、細字注を持つ断簡も存在していて、極めて興味深い資料である。現在巻十以下の切が見つかっており、冊子上下2帖のうち下の文が分割されたことになる。5行目「たかのゝやま」(紀伊国)は高野山のことで、和歌ではこの語を用いる。

4 新勅撰和歌集断簡（伝二条為氏筆）鎌倉時代後期写 1軸

斐紙(縦23・1、横13・9糎)に巻十七雑二1175・1176を写す。切の中央に折れ目が見られるけれども、元来は列帖装丁のウラ面と思われ、折れ目は後についたものであろう。『新撰古筆名葉集』為氏の項「同(四半) 新勅撰二行書」に相当。二条為氏(1222～1286)よりは若干下る頃の書写か。藤井隆・田中登『続国文学古筆切入門』28のツレである。古筆了音(1674～1725)の極札に「癸巳 九」と見えるのは、正徳3年(1713)鑑定の謂。3行目に「はつせ山」(初瀬山、大和国)の地名が書かれる。

5 新続古今和歌集 江戸時代前期写 写字台文庫(西本願寺)旧蔵 列帖装2冊

丁字吹きのに金銀の縦罫を引いた紙表紙(縦24・9、横17・8糎)、その左端に藍内曇(縦15・6、横3・3糎)を押し「新続古今和歌集 上(下)」と墨書。題簽は本文と別筆で、飛鳥井雅章(1611~1679)の手と思われる。本文料紙、斐紙。毎半葉9行(序)10行。巻首に「写字台之蔵書」、巻末に「藤紫華下書窓」の蔵書印あり。写字台は、本願寺門主の便殿すなわち常用の居室を意味し、ここに集められた膨大な書物は明治24年(1891)龍谷大学譲渡分だけでも42,000冊を超える。

掲出本題簽揮毫者飛鳥井雅章は二十一代集すべてを自ら写しており(書陵部508-208)、掲出本もまた雅章周辺で調べられたものであろう。新続古今和歌集撰者飛鳥井雅世(1390~1452)の家に伝わった筋の良い本。「いはし水」(石清水、山城国)・「かすがやま」(春日山、大和国)・「あさか山」(浅香山、陸奥国)「玉津しま」(玉津島、紀伊国)など、仮名序の終わりに歌枕の頻出する箇所を展示。

(参考) 新続古今和歌集断簡 仏光寺切 堯孝筆 室町時代初期写 台紙貼1紙 *

斐紙(縦25・9、横17・9糎)に典雅な書風が映える。極札に飛鳥井雅世(新続古今和歌集の撰者)とあるが、新続古今和歌集編纂時の和歌所開闔を務めた堯孝(常光院、1391~1455)の筆跡。したがって、新続古今和歌集の本文資料中最も尊重されるべきもののひとつである。

薄く巻物皺があり、もとは大振りの卷子本。1首を2行にゆったりと写し、当時としては贅沢な作りであったろう。順徳天皇御製の下句「きさ山」(象山)は大和国の歌枕。

6 [未詳歌集]断簡 金剛院切 (伝亀山天皇筆) 鎌倉時代後期写 1軸

金銀泥にて草花・土坡・霞・雁等を描いた豪華な楮紙(縦26・7、横13・2糎)、もと卷子本の定数歌詠進資料。相当身分の高い女性のものであろう。下絵装飾料紙に題・詠者名・散らし書きは、女房懐紙の作法通りである。典雅な料紙と筆跡は勿論、散佚定数歌復元資料としても、第一級の価値を持つ。切名は亀山天皇陵の浄金剛院によるか。1行目に「すまの浦」(須磨の浦、摂津国)、4行目に「ふしみのさと」(伏見の里、山城国または大和国)の地名が見える。

7 八雲御抄 江戸時代初期刊・同後期刷 袋綴7冊

墨色無地紙表紙(縦25・5、横18・0糎)左肩に子持杵(縦16・3、横2・9糎)題簽を押し、「八雲御抄 一(~六)」と刻す。ただし巻三は三上・三下の2冊とし、6巻7冊。寛永12年(1635)の刊記を削去した後刷本だが原装・原題簽を伝え、押巻装の残る冊もある。毎半葉8行(序と目録)・11行(本文)、匡郭なし。版心「八雲抄 一(~六) (丁付)」。

承久の変(1221)以前に順徳天皇(1197~1242)の手により草稿が作られ、晩年に完成。第一正義部・第二作法部・第三枝葉部・第四言語部・第五名所部・第六用意部にそれまでの学説を集大成し、後代への影響はきわめて大きい。展示箇所は巻五名所部「山」、「かみやま・をぐら山」等の歌枕が並ぶ。

8 類字名所和歌集 江戸時代前期写 列帖装8冊

紺地に金泥の土坡・秋草・霞引きの豪華な紙表紙(縦24・2、横17・2糎)、押笈装を持つ。左肩に縹色地金泥下絵題簽を貼り「類字名寄 一(〜八)」と墨書、見返しは紗綾形艶刷りの金紙。上質の斐紙を用い贅沢に装幀した、所謂嫁入本である。内題「類字名所和歌集 一(〜八)」、各冊に目録を分載し、每半葉10行和歌1首2行書を原則とするが、まれに1行書もある。「類字名寄」の金蒔絵箱入り。

元和3年(1617)刊古活字版を初出とする類字名所和歌集は、7巻7冊和歌8821首の大規模な編著であるが、掲出本はこれを縮約したものである。巻一を例にとると、元和本1034首から332首を抄出する。このままだと全体の分量が減り冊数も少なくなるので、巻六を嵐山〜紀伊海と弓槻嵩〜白河に分け、都合8冊とした。この仕立ては、掲出本において独自になされたと言うよりは、杉田勘兵衛刊の整版本あたりに従ったのであろう。当館には承応2年(1653)刊の原装本も所蔵する。飾磨(播磨国)の箇所を展示した。

(参考) 類字名所和歌集 零本 元和3年(1617)刊 古活字版 袋綴1冊 *

海老茶色紙表紙(縦28・1、横21・3糎)の古表紙中央に「名所和歌集」、その左脇に「ゑひも／せす」と墨書。每半葉11行和歌1首1行とし、上部に細字出典注記、下部に作者名を割注形式で刷る。最終丁に刊記「此一部者互見廿一代集数多／之本而抄出名所和歌也／愚暗所撰恐有舛謬猶後見之／輩勿憚改而已／元和三曆仲秋下旬 法橋昌琢判」。版面の印象からは寛永期(1624〜1644)の出版のようだが、元和5年(1619)以前に尾張徳川家で購入した文証があり、「元和三曆」は刊行年を示すものと考えられる。名所をイロハ順に集め、地域ごとに下位分類した書物で、展示箇所は末尾刊記部分。

9 歌枕秋の寢覚 巻2欠 正徳4年(1714)刊 袋綴6冊

藍無地紙表紙(縦22・8、横16・0糎)左肩に無郭の題簽(縦16・1、横3・7糎)を押し「増補歌枕秋の寢覚 山一」の如く刷る。巻七末尾に「正徳四甲午仲稔吉日／江戸通本石町十軒店／中村屋進七」以下「金屋利兵衛」まで4書肆を載せる刊記。

『歌枕秋の寢覚』の撰者有賀長伯(1661〜1737)は、自著の改訂を意図して果たさず、弟子が増補本を完成させた。『八雲御抄』に従い歌枕を山・嶺・谷等に分類、簡略な説明を加え、さらにイロハ順の下位分類を行う。掲出の正徳四年版は、巻二を欠くものの最も流布の少ない版本であり、巻頭に引用書目の一覧表を持つ。展示箇所は、巻一山の部冒頭。

(参考) 増補歌枕秋の寢覚 横本および縦長小本 *

横本=『歌枕秋の寢覚』は江戸時代最も流布した歌枕書であり、おびだしい種類の版本が作られた。中でも横本形式のものが広く受け入れられている。横本は実用書に多用される装幀。掲出の横本は、青磁色地に有職文様を押し出した紙表紙(縦11・2、横16・0糎)左肩に無郭の題簽(縦8・8、横3・1糎)に「歌枕秋の寢覚 上(下)」と刷る。下冊末に「寛政八丙辰春再鐫」以下敦

賀屋九兵衛・吉文字屋市左衛門連名の刊記。巻頭山の部を展示した。

小本＝渋引布目紙表紙(縦20・0、横5・9糎)中央に単郭題簽を貼り、「〔 〕中安紀乃年謝梅」と刻したのは、勿論「掌中あきのねさめ」。両面刷り小型折本の形式で、従来の歌枕書がイロハ順か地域別分類かを採用するのに対し、五十音順に整理されているところが珍しい。ただし「ヲ」はワ行でなくア行に配され、中世以来の音図に従っている。展示箇所は、ア行「ウラノ山」の次に「ヲシホ山」が並ぶところ。

10 名所方角鈔 寛文6年(1666)谷岡七左衛門刊 袋綴1冊

藍無地紙表紙(縦15・4、横11・2糎)左肩に子持ち枠(縦10・4、横2・1糎)の題簽を押し「名所方角鈔 全」と刻す。見返しは簡略な飾り枠に「名所方角鈔／宗祇法師作」と薄墨刷り、当該時期に本文とは別の色を用いて見返し印刷をする例は珍しい。每半葉6行(目録)・9行(本文)。撰者を宗祇とする根拠は、この見返しのみである。全180丁の厚冊だが、元来1冊本として出版されたのであろう。180丁オモテに刊記「寛文六丙午歳仲夏吉辰／下御霊ノ前／谷岡七左衛門板行」。なかなかの美本である。

東海・東山・畿内・山陽の順に名所を配列し、最後は佐渡。各名所に勅撰集より引用した和歌を載せ、説明する。その記述は繁簡一様ではないが、山城および東国諸国は実際の旅行体験を反映したかと思われるほど具体的であり、成立・撰者推定の手がかりとなろう。

名所方角鈔は掲出の谷岡版が初出、増補して絵を入れた寛文12年版・延宝6年版など8種以上の異版が存するが、諸本の本格的な研究は、まだなされていない。山城国冒頭部を展示した。

11 伊勢物語絵 江戸時代前期制作 4枚

尋常の間合紙(縦23・6、横16・5糎)に濃彩の素朴な大和絵を描く。奈良絵本より絵のみ抜き出したもので、上下2冊仕立ての下冊分に相当。上冊24図と下冊冒頭3図を欠き、現在第51段～125段までの22枚を所蔵する。図柄は嵯峨本伊勢物語による。嵯峨本伊勢物語は後続出版の源泉となり、多くの整版本がこれにならって作られた。鉄心斎文庫所蔵奈良絵本伊勢物語(3冊本)も嵯峨本に依拠するけれども、掲出資料の方がいっそう忠実に原拠たる嵯峨本の構図を継承している。

物語にあらわれる歌枕から、住吉の浜(第68段)・小野(第83段)・布引の滝(第87段)・竜田川(第106段)を展示。

(参考) 伊勢物語 覆嵯峨本 江戸時代前期刊 袋綴2冊

砥粉色地に梅・鶯等を雲母刷りし、嵯峨本の遺風を伝える紙表紙(縦27・0、横19・1糎)。下巻末に「慶長戊戌申／也足叟」の識語を載せるが、これは掲出本の基となった嵯峨本刊語の襲用である。嵯峨本伊勢物語は、慶長13年(戊申、1608)5月初印、同5年までに4種9版以上作られ、人気の高い出版物であった。掲出本は第2種イ版に依拠し、挿絵・本文ともに精度の高い覆刻である。「13 伊勢物語絵」と比較されたい。

12 源氏物語 賢木・明石 奈良絵本 江戸時代前期写 列帖装2冊

紺地に金泥にて土坡・秋草・霞等を描く紙表紙(縦24・0、横17・7糎)、その左端に朱題簽を押し「さかき」「あかし」と墨書。巻ごとに表紙意匠を変え、金布目紙見返しを用いた贅沢な典籍であり、普通「嫁入り本」と呼ばれる。精良な斐紙に毎半葉10行17字程度書写、絵の前では散らし書きとし余白の生ずるのを避けるのは、奈良絵本によく見られる手法。慶安3年(1650)山本春正刊絵入源氏物語の挿絵に依拠し、極彩色で描く。展示箇所は、歌枕「明石の浦」(播磨国)を舟で行く光源氏。

(参考)絵入源氏物語 明石 慶安3年(1650)刊 袋綴1冊

藍無地紙表紙(縦20・0、横18・3糎)中央に無郭の題簽(縦17・4、横3・3糎)を押し「あかし十 歌と詞を名とせり」と刷る。毎半葉11行、絵6図。丁付はノドの部分に刻し、絵の右に「ワ十」とある「ワ」は、源氏物語の巻をイロハ順に読んだもので、明石の巻が13番目であることを示す。掲出の絵入源氏物語は後代に大きな影響を与えた。

13 源氏物語絵 浮舟 安土桃山時代写 1軸

色紙形(縦26・1、横21・5糎)大和絵の手法で冬景色を描き、古雅な裂地にて表装。衣紋・面貌ともに念入りな賦彩が美しい。登場する男女は浮舟と薫大将、匂宮ことで心曇る女と、事情も知らず久方ぶりに宇治を訪れた男とが向き合う場面であり、寒々とした川辺には1羽の鷺。絵の静謐さに比べ、人物の内面は複雑に波立つ。

源氏物語の本文では「山のかたは霞へだてて、寒き州崎に立てるかささぎのすがたも」とあり、州崎にいるのは「かささぎ」である。これは、絵師が物語を誤読したのではなく、中世の古注釈に鷺と解するものがあり、それに従った絵画化なのである。「宇治川」は勿論山城国(京都府)の歌枕。

14 扶桑名所名物集 零本 安政4年(1857)刊 袋綴1冊

薄縹色布目紙表紙(縦22・7、横15・6糎)左肩に原題簽あるも、破損。ここに「扶桑名処名物集 伊豆相模」と刷る。匡郭なく本文毎半葉13行27丁、無刊記。見返しに題号「扶桑名所名物集」、撰者「龍の門梅明大人」と絵師「一猛斎芳虎」、および「安政四」の年紀が見える。内題は「扶桑名所名産集」、ちなみに国書総目録は「狂歌扶桑名所名物集」として掲出。撰者梅明(1746~1859)は本名田中重兵衛、檜園と号して狂歌作りの仲間「檜垣連」を率い、勢いがあった。伊豆・相模の名所を抜き出し、狂歌を掲げたもの。安政4年から撰者没後の同7年にかけて19巻を刊行、趣味的な出版である。展示箇所は、鎌倉鶴岡八幡。「民くさや切なひけよと／其むかし心ありてや／鎌うつみけむ」以下5首を載せる。

15 江戸名所図絵 明治26年(1893)博文館求版本 袋綴20冊

川波に鳥(都鳥か)を押し出した藍紙表紙(縦26・0、横18・6糎)左肩に題簽、子持ち枠(縦17・3、横2・6糎)中に「江戸名所図会 一(～二十)」。全7巻で、巻第1・2を各3冊、巻第3を4冊の如く分冊し、合計20冊となる。最終冊末尾に「明治廿六年十二月十三日求版」以下の刊記、刊行者は博文館大橋新太郎。したがって掲出本は近代の後刷本だが、江戸名所の基礎資料を、明治の新出版代表者博文館が刊行したことはあまり知られていない。

神田雉子町の名主齋藤家のあるじ齋藤幸雄が江戸および近郊を調査、子幸孝がその業を継ぎ、孫幸成(号月岑、1804～1878)の手によって高水準・大規模の名所図会が完成。全20冊の刊行が終了したのは天保7年(1836)、江戸市街のみならず房総半島から金沢文庫あたりまでを収載範囲とする、総合的な地誌である。現地へ出かけて直接対象を捉えた絵師長谷川雪旦(1778～1843)の精細な描写が、名所図会の価値を一層高めている。展示箇所は巻二天[さん]之部、鶴見橋。奥に見える山の麓に、総持寺や鶴見大学が建てられることになる。